

第15回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」 実施報告

【開催日時】 2014 年 11 月 15 日(土)10:00～13:00

【会 場】 株式会社共立メンテナンス 2F

【後 援】 文部科学省

外務省

産経新聞社

【協 賛】 株式会社 共立メンテナンス



前列左より:今岡 直毅さん、北原実行委員、越前谷審査委員長、大塚審査委員、建部 祥世さん
後列左より:佐藤 文子さん、原田 有理子さん、生駒 知基さん

【概要】

当財団では「日本人がアジアについて考え、実際に体験することでアジアに対する理解を深め、留学するきっかけにしてもらいたい」という目的でこのコンテストを年 1 回開催してきました。回を重ねるにつれ日本人学生からも大きな反響があり、入賞者の中には大学を卒業後、中国の企業に就職、あるいはベトナムに留学するという実績を積み重ねてきました。

2015 年度は、昨年度に引き続き、今後日本との関わりが強まることが期待されるミャンマー、インドネシア、カンボジアの 3 か国を対象国とし、第 15 回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」を開催致しました。

企画内容は①日本語教育体験あるいは日本語教育の現状調査、②現地で必要とされる事業の調査・進出する日本企業等の調査、③医療・サービス等の調査研究をテーマとして、日本の学生が 3 か国に貢献できる内容の企画書を作成してもらいました。応募者は、書類選考による 1 次審査の後、21 名が 2 次審査(面接)に参加しました。

当日はグループごとに面接による選考を実施いたしました。審査委員 3 名による選考がおこなわれ、「夢・アジア体験賞」の入賞者 5 名を選考しました。

■受付



■グループ面接の様子

第 1 グループ 11 名(カンボジア)



第 2 グループ 10 名(インドネシア・ミャンマー)



10～11 名での面接ということで、他の参加者の企画や意見を聞くことができ、学生同士良い刺激になったようです。面接終了後はお互いの企画について意見を交わし合う姿が見られました。

■授与式の様子

グループ面接の後、審査委員 3 名による慎重な審査の結果、カンボジア 2 名、インドネシア 2 名、ミャンマー 1 名、計 5 名の入賞者を決定致しました。

式次第

- 一、開会の辞
- 一、実行委員長 挨拶
- 一、審査委員長 講評
- 一、賞状 授与
- 一、奨励賞 授与
- 一、閉会の辞



北原実行委員長 挨拶



越前谷審査委員長 講評





北原実行委員長より
入賞者 5 名に賞状が授与されました。



大塚審査委員より
2 次面接参加者に奨励賞が授与されました。

■入賞者 5 名

対象国	採用者	学校名	企画書タイトル
カンボジア 	いまおか なおき 今岡 直毅	東京医科歯科大学大学院	Hope Soap プロジェクト in カンボジア ～手洗い習慣の実情調査～
	さとう あやこ 佐藤 文子	成蹊大学	プノンペンで、市民による「まちづくり」 を考える
インドネシア 	はらだ ゆりこ 原田 有理子	九州大学	インドネシアの理解と今後のインドネシア人 看護師支援への可能性
	いこま ともき 生駒 知基	東京大学	害獣として駆除されるスマトラゾウに対する 人々の意識の調査と解決策の模索
ミャンマー 	たてべ さちよ 建部 祥世	筑波大学	僧院における日本語教育の現状調査と年 少者向けの日本語教育の実践

講 評



実行委員長 兼 審査委員 北原 賢三

神田外語大学 特任教授 教育学博士 兼 キャリア教育センター長
一般財団法人 共立国際交流奨学財団 評議員・奨学金選考委員

今回のコンテストにはカンボジアで体験を企画した応募学生が多かった。カンボジアは幾多の戦禍を経てやっと安定した国造りに向かっているときである。こういうときに、日本の学生が様々な視点からカンボジアに関心を持つことは

将来の両国の関係を考えると意義深いことだと思う。カンボジアでの体験を希望する応募学生の企画内容は、今回はユニークな視点だなと感じる企画があった。例えば、日本映画を紹介して、その反響を試みて、日本映画産業の参入が可能かという内容である。これはたいへん興味深い企画であるが、範囲が広く、黒沢監督の映画からアニメに至るまでの、どのジャンルを紹介するのかによって反応が異なるだろう。若い世代を相手に考えるとすると、アニメが主流なのかなと想像する。その他に、プノンペンの街づくりに日本の経験を省みて、単に高層ビル群が立ち並んだり、高速道路が建設されたりという無味乾燥ともいえる街づくりでよいのかを現地の学生と議論してみたいという企画もあった。プノンペンの街づくりの企画は、これまでにない発想であった。これから急激に発展していくカンボジアであろうが、日本も含めて過去の例をみると、その国の伝統的な街並みのよい面が失われていった。日本のようにならないでほしいという思いからの企画である。あるいは、インドネシアでの体験を希望する学生の企画では、スマトラ象の保護の問題を考える内容が新しい視点からなされていた。それは、森林破壊が進むと同時に象は害獣として駆除されていく。そこには日本のクマと自然環境との同様の問題を含んでいるというものである。最後にミャンマーでの体験を希望する応募学生の企画でミャンマーの伝統芸能が消えていく恐れがあるので記録を残す試みがあった。こういう事実を目を向けることはミャンマーの文化的側面を知ることになる。以上のように、優れた視点を持つ企画が多かった。賞に選ばれた学生は他の応募学生の分まで努力してよい体験をするように大いに期待したい。

審査委員長 越前谷 明子

東京農工大学 名誉教授
一般財団法人 共立国際交流奨学財団 奨学金選考委員



面接会場に応募者の「よろしくお願いします」の声がひびく。第1グループ(11名)、(第2グループは10名)の集団面接が始まる。「企画の目的を手短かに話してください」という実行委員長の言葉に、応募者のやや緊張しながらも、企画の内容を説明するその声に、審査委員が耳を傾ける。そして、一緒にいる10人の応募者も、ある者はあいづちを打ち、ある者は微笑みを浮かべ、あるいは「おもしろい！」と目を輝かせる。会場が一体となった瞬間。

カンボジアでは、日本映画や自転車産業の参入の可能性を調べる、カンボジアとの関係を深めるためのシンポジウムを開催する、日本語教育の現状調査を行う、Hope Soap を実施する、観光業の問題点を探る、予防医学、市民によるまちづくりを考える等々、インドネシアでは、日本の中小企業の進出、歯科治療、スマトラゾウの保護、生活習慣病、IT 教育、医療問題、ものごい、等についての実情調査企画、ミャンマーでは、日本企業の企業行動、僧院での日本語教育、伝統芸能の実態調査と映像化について、それぞれの思いを述べていく。なんと話題が豊富で、これをお読みの皆様方も「どんなことなの」と興味をそそられていらっしゃるに違いない。

この中から5つの企画が採用になった。審査員が目にしたのは、企画の実現可能性と、企画の実施後、その結果として得られた情報をどのように発信して、情報を共有するかへの配慮がなされているかという2点であった。

若い人々がその夢を実現させるプロセスでのサポーターとなることこそ、本企画を長年継続させてきた「共立国際交流奨学財団」の願っていることであり、私も審査委員の一人として、皆さんの企画の実現にお手伝いが出来たことを喜んでます。いってらっしゃい！ 皆さんからの報告を楽しみにしています。